

中世におけるアラビア・ヘブライ言語学： 語根理論の発展を中心に

高橋洋成（筑波大学大学院）

キーワード：語根、ハリール、シーバワイヒ、サアディア、ハイユージ

1 はじめに

セム語¹における形態論では、「語根」という概念が中心的な位置を占める。語根は通常 3 つの子音からなり、語彙的な情報を担う要素とされる²。一方、語の形態論的範疇は接辞や母音パターンといった「語型」によって規定される。たとえば、聖書ヘブライ語³では、k-t-b「書く」という語根に対し、hi-i-という使役動詞を表す語型が互いに織り重なることによって、hiḵtib「彼は書かせた」という動詞が形成される⁴。同じように、k-t-b という語根から、ktōb「手紙」、miḵtōb「書かれたもの」といった名詞類をも作ることができる。このようにして、語根を共有する語のグループが形成されていく。

こうしたセム語における語根という概念はいつ、どこで、どのような必要から生まれたのであろうか。本稿では、中世（10 世紀以前）の代表的なアラビア語学者およびヘブライ語学者をとり上げ、当時の背景を踏まえつつ、語根理論がどのように展開されたかを追ってみたい。

¹ セム語 (die semitische Sprache) という名称は、1781 年に Ludwig Schlösser が初めて用いた。しかし、アラビア語とヘブライ語の類似性は早くから認知されており、イエフダ・ベン・クライシュ (9 世紀末～10 世紀初頭) は両者の起源的同一性について論じている。

² ただし、2 子音、4 子音 (時として 5 子音) からなる語根も少なくはない。

³ 本稿では、聖書ヘブライ語のローマ字転写方法として、池田・高橋・池田 (2003) による筑波方式を用いる。

⁴ k、b は、摩擦音化したことを表す。

2 文法学と語彙学

2.1 言語に対する学問の始まり

人間が自分の母語に対して興味を持ち、それを正確に記述したいと願うのは、どういうときだろうか。

アラビア語における最初の文法学者と称されるアブー・アル・アスワド (Abū al-Aswad, 603/4~688/89) には、次のような伝承が残されている⁵。彼はイスラム大分裂期にアリー派に属していた。ある日、ウマイヤ朝ホラーサーン知事であるジヤード (Ziyād) が使いを出し、アブー・アル・アスワドにイマーム (指導者) になるよう依頼した。アブー・アル・アスワドは一旦それを断った。だが後になって、クルアーンのある 1 節が間違った読み方 (すなわち、母音の付け方) をされ、その箇所が冒瀆的な意味になってしまっているのを耳にした。そこで彼は考えを改め、依頼を引き受けた。彼はある 1 人の書記に対し、自分が朗読する通りに母音記号を記すよう厳格な指導を行った。「私がある文字で口を開ける (aftah) のを見たら、その上に点を打つべし。私が口を閉じたら (aḍummuhu)、点を文字の前に打つべし。私が口をすぼめたら (aksuruḥu)、文字の下に点を打つべし。」と。

アラビア語表記における母音記号は、実際にはアブー・アル・アスワド 1 人の創作ではなく、同じ頃の初期の文法学者 (Naḥwi) によって徐々に形成されたものと考えられている。伝承の内容の真実性についてはここでは論じないが、上記の伝承には、「言語の体系性について学問」が生じるための重要な条件が含まれているように思われる。

第 1 に、何らかの理由で「正しい言語知識」が必要になることである。上記の伝承では、コーランの朗読方法に誤りが混入したことに対し、アブー・アル・アスワドが危惧を感じたことが、アラビア語という言語の文法記述・語彙記述のための契機となった。こうした「正しい言語知識」が、外国人のイスラム改宗者に対しても必要であったことが、別の伝承⁶にも示唆されている。こうしてもたらされた文法的・語彙的知識は、新たな語彙

⁵ Haywood (1965: 11-12) を参照。

⁶ Haywood (1965: 12) を参照。

の創造による表現手段の多様化にもつながる⁷。

第 2 に、文法の記述を行うためには、母音を表す何らかの手段が必要だった。Tene (1971: 1354) は、アラビア語文法家がヘブライ語文法家に先んじて発生した理由の 1 つとして、母音表記法の確立時期を挙げている。だが、アラビア語表記にもヘブライ語表記にも、それまで母音を書き表す手段が全くなかったわけではない。特定の文字を母音を表すために用いる、いわゆる長書き (scriptio plena) は存在していた。ところが、長書きは一貫した表記体系としては発展せず⁸、これに基づく文法記述も生まれなかった。長書きによる母音表記と、母音記号との最大の違いはどこにあったのか。それは、字節から音節構造を想起しやすいかどうかでなかったかと筆者は考える。長書きでは、どの字節とどの字節が音節を構成しているのかが判別しづらく、文法記述という面ではかえって混乱を招きかねない。それゆえ、一貫した母音記号の発明が、少なくともアラビア語・ヘブライ語の文法記述のためには必要だったと考えられる。

2.2 語根という術語

ところで、「語根」という用語は、アラビア語の *aṣl* 「根、起源」(複数形 *uṣūl*) から来ている。Gibb et al. (1954) によると、この *aṣl* は、音韻論・形態論・統語論などの分野で、さまざまな意味に用いられている。

音韻論の分野では、(1) 異音に対する音素、(2) 音変化を被る前の本来の音 (e.g. *iṣṭabara* 「彼は忍耐強かった」において、*t*→*ṭ*/*ṣ* の *t*)。

形態論の分野では、(3) 語の派生体系において、語彙を指し示す文字列 (e.g. *f-ʕ-l*)。 (4) 接辞に対する語根素 (e.g. *maktab* 「オフィス」における *k, t, b* がそれぞれ *aṣl*)。 (5) 異形態に対して、最も基本的な形態素と考えられるもの。 (6) 形態音韻論的に基底形と考えられるもの (**ḳawala*→*ḳāla* 「彼は話した」)。

⁷ 後述するサアディア・ガオンなど、こうした活動は書物の翻訳においても重要であった。

⁸ 紀元前後のヘブライ語表記では長書きが頻繁に用いられた (e.g. 死海文書) が、聖書テキストそのものの権威が高まるにつれ、テキストに文字を付け足すという行為が避けられるようになった。それゆえ、母音を表記するための他の手段が必要になったのである。ヴェルトヴァイン (1997: 44-45) を参照。

(7) 語形変化パラダイムにおける規則そのもの。

統語論の分野では、(8) 統語的な「規則」そのもの。(9) 統語的に基底と考えられる構造。

その他、(10) 語の根本的な意味 (e.g. min 「～から」の aṣl は「範囲の始め」)。(11) 語の集合の基本的条件 (wa-, fa-, tumma などの集合の aṣl は「等位接続詞」)。(12) ある範疇に先行する範疇 (e.g. 動詞に対する名詞、複数形に対する単数形)。

本稿が対象とする aṣl は、形態論的な aṣl、すなわち語根および語根素である。

3 語彙学における語根

3.1 アラビア語学者ハリール

今日では、いわゆるアルファベット順による辞書という形式がごく当然のように考えられている。しかし、歴史を振り返れば、この方式の成立には多くの試行錯誤があった⁹。アラビア語彙学では、最初にごく限られた語彙が、確たる規則なしに並べられた。次の段階では、音声学的な原理と、語根を構成する文字数という基準が立てられた。さらに、後に語根は脚韻順 (rhyme order) に並べられることもあった。今日よく見られるような、語根の各文字のアルファベット順という並べ方は、わずかな試みがあったにせよ、広く普及するには至らなかった。

辞書の配列に、音声学的原理と語根の文字数という基準を導入したのは、ハリール (Abū ʿAbd al-Raḥmān al-Kalīl ibn Aḥmad al-Azdī, 718~791 頃) の『アインの書』(Kitāb al-ʿAyn) である。アラビア系文字の最初の文字 (アリフ) は弱文字であるため、その順番に並べることは理論的な一貫性がない。そこで彼は、文字の発音上、調音点が最奥のもの (すなわちアイン¹⁰)

⁹ 詳細は Haywood (1965: 1-10) を参照。

¹⁰ 現代の調音音声学の観点からは、必ずしも調音点の順とは言いがたい。たとえば、最奥の調音点を持つものは本来 ? および h である。だが、ハリールの配列では、h よりも喉の緊張を伴う ? の方が「奥の発音」と見なされている。有声・無声の対立は考慮されておらず、また、弱文字として表される音 (w, ʔ, y, およびハムザ) が、例外として配列の最後に置かれている点に注意を要する。

から順に並べていくという方法を採用した。その配列は以下の通りである。

f, h, ḥ, k, ġ, ḳ, ž, š, ḍ, ṣ, s, z, ṭ, d, t, z, ḍ, ṭ, r, l, n, f, b, m, w, ʔ, y, ハムザ

次に、アラビア語の語は、4種類の語根から成り立っていると述べる。すなわち、2文字から成り立つもの (kaḍ「すでに」、lam「～でない」、hal「～か(疑問詞)」、law「もし」、3文字から成り立つもの (kaḥaba「それは壊れた」、daḡara「彼は保った」、žaḡal「ラクダ」、4文字から成り立つもの (daḡraža「それは転がった」、ḥamlaža「彼は馬に乗った」、žaḡudub「イナゴ」、5文字から成り立つもの (ʔisbakarra「彼は痩せた」、saḡaržaḡal「マルメロ(の実)」)である。ここで、語頭のアルフは語根に含まれるものではなく、発話において舌を語根の最初の文字(の調音)に導くためのものと解釈される。つまり、舌は母音のない文字を発音できないため、ʔisbakarra ではアルフ¹¹が必要になるのである。しかし saḡaržaḡal では、補助としてのアルフは必要ない。

また、ここで2つの仮説を導入する。1つは、アラビア語では、動詞にしる名詞にしる、5文字以上から成る語根を持たない、ということである。それゆえ、kaḡarḡbalān の「語根形」は kaḡarḡbal である。また、ḡankabūt の「語根形」は ḡankab「クモ」とされる。もう1つの仮説は、名詞語根が2文字以下になることはない、ということである。たとえば、zaid、kaid「計略」においては、語根の2文字目に y が内在している。また、kaḡad、law は、kaḡaddum、lawwun のような形を見れば分かるように、内在的な3文字を持つ。さらに、複数形や指小形で内在的な語根文字が現れることもある。たとえば、fam「口」の双数形は famawāni となるため、語根として f-m-w を考える。しかし、fam の複数形は afwāh、動詞が fāha～yafāh という姿を見せる。それゆえ、fam の語根は f-w-h であると考えられる。

こうして、音声学的原理と形態論的原理に基づき、ハリールは辞書を編纂した。そもそも、アラビア語の語彙学では、稀にしか現れない古い語彙

¹¹ 正確には、語頭の子音連続を避けるための補助音節。

の説明よりも、その当初から完全な語彙目録の作成を目指していた、ということには注目に値する¹²。

3.2 ヘブライ語学者サアディア・ガオン

ユダヤ人の間でヘブライ語についての言語学的な研究が始まったのは、少なくとも 10 世紀に入ってからとされる。その背景として挙げられることは、第 1 に聖書テキスト、母音・抑揚記号、およびマソラ¹³の記述など、マソラ的作業がティベリアにおいて一応の完成を見たことである。特に、先に論じたように、一貫した母音記号体系の確立が、文法記述の発展には欠かせない要素であった。第 2 に、この時期におけるユダヤ人の文化的中心はアラブ文化の影響下にあり、密接な関係にあった。それゆえ、ユダヤの知識層は、アラブ人の言語学的成果をすでに知っており、その理論の概念と道具を使ってヘブライ語を記述することができた。第 3 の理由として、カライ派¹⁴の出現を挙げることができるだろう。カライ派では、その信念の必然的な帰結として、聖書テキストを構成するヘブライ語そのものに対する研究が生じた。しかし、その主張は一種の原理主義であり、聖書テキストの理解においても、語義を「しるし」として解釈するといった伝統主義に拠っていた¹⁵。それゆえ、カライ派では、アラビア語文法の影響を受けた分析主義¹⁶を認めない。このようなカライ派の運動に対抗し、マソラやタルムード的な方法とは異なる、新たな方法で聖書テキストを精査する必要が生まれた。

¹² Haywood (1965: 2) を参照。

¹³ マソラ (mosoro) の正確な意味は不明だが、一般には「伝統」と解釈されている。聖書テキストを正確に保存すべく研究された、さまざまな説明・注解の結集である。初期は写本の欄外に書かれたが、次第に拡張され、やがて独立した書物となった。こうした研究に従事した学者のことをマソラと呼ぶこともある。マソラ学者らは、写本間の異文や特異性の全てに注意を払い、表としてまとめ、さらに語数や文字数を計算することで、聖書テキストの正しい読みを保存しようとした。こうした研究によって伝承された聖書テキストを、マソラ本文と呼ぶ。

¹⁴ 8 世紀後半に生じたユダヤ教分派で、ラビによる統制とタルムードの厳格な適用を中心とする正統派に反対し、聖書原典への復帰を提唱した。

¹⁵ 亀井孝他 (1996: 1216) を参照。

¹⁶ たとえば、子音列を語根と見なす考えなど。

ベン・アシェル (Aḥaron ben Moše ben Ašer, 906 頃～960) が「最後のマソラ」であるのに対し、サアディア・ガオン (Saadiyah ben Yosep̄, 882～942) は「最初の文法家」と称される。彼の主たる目的は、アラビア語を日常語とするユダヤ教徒のために、聖書をアラビア語に翻訳することであった¹⁷。

サアディア・ガオンの『辞典』(Kutub al-Luġa) で論じられていることを特に語根に関して見てみたい。^ʔ.k.o.w.me.m 「私は立たせる」(Isa 44:26) は、ʔo.ki.y.m 「私は立たせる」(Amo 9:11) の拡張形と考えられる。あるいは、sa.l.s.le.ho 「(それ・女性単数を) 高めよ」(Prv 4:8) は so.ll.u^w 「高めよ」(Isa 57:14) の拡張形と考えられる。つまり、彼はここで、基本形 (uṣūl) と二次的な形 (furūf) を明確に区別しているのである。また、彼は二次的な拡張形だけでなく、縮小形にも注意を払っている。たとえば、不定詞 hlwk に対し、命令形 lk 「行け」は二次的な縮小形である。こうして基本形を導き出した後、彼は 2 種類の語彙の配列を行っている。第 1 部では、最初の文字と次の文字によるアルファベット順。第 2 部では、最後の文字によるアルファベット順。こうした並べ方は、作詩上の技法による必要に応じたものであった。

4 文法学における語根

4.1 アラビア語学者シーバワイヒ

語彙の選定において何を基本形とするかには、文法的な基準に基づく判断が常に伴う。そういう意味で、文法学は語彙学に先行するものと言えよう¹⁸。

シーバワイヒ (Sībawayh, 本名 Abū Bišr ʿAmr ibn ʿuṭmān, 不明～792/3) は、音韻論・形態論・統語論の分野でさまざまな議論を行っているが、特に形態論に関してそのほぼ半分を割いている。名詞、動詞、小辞における全ての変化パターンを数え上げ、そこから語根と接辞とを注意深く分離して、最終的に語根の文字数 (最小は 2、最大は 5) ごとに分類した。また、

¹⁷ こうした仕事はカライ派の動きに対抗するものでもあり、また同時期の北アフリカ～スペインにおけるヘブライ語学者に呼応するものであった。

¹⁸ Haywood (1965: 17) を参照。

可能な変化形を挙げ、語型と機能とのつながり、さらには固有名詞や借用語の振る舞いに至るまで精査した。このように、シーバワイヒは変化パラダイムからの帰納法によって、アラビア語の動詞はほぼ 3 文字からなる語根から成り立つこと、そして派生動詞の語型の規則を詳細に論じたとされる¹⁹。

4.2 ヘブライ語学者ハイユージ

ハイユージ (Yehuda ben David Ḥayyūj, 940~1010 頃) は、ヘブライ語の動詞組織に、シーバワイヒによる動詞の 3 文字語根理論を導入した最初の人物とされる。

彼は最初に、二つの仮説を立てる。

仮説 1: ヘブライ語の動詞は、三文字からなる語根を持つ。

仮説 2: ヘブライ系文字は、mobile と quiescent の二つの性格を持つ。

仮説 3: quiescent な文字は 2 つ以上連続しない (ただし mobile な文字が先行する場合に限り可)。

ここで仮説 2 についてももう少し説明すると、全ての文字は有音 (mobile) と無音 (quiescent) の状態がありうる。ところが、ʔ、w、y、(h) の 4 つの文字に関しては、quiescent な場合に他の文字とは異なる振る舞いをするところがある。他の文字は quiescent な場合でも「見える」、すなわち書かれ、読まれるのに対し、上記の 4 文字は時として「隠れる」、すなわち、語の構造として存在しえても、発音上は実現されず、時には表記上も実現されないことがある。たとえば、kə.ʔ.m 「彼は立った」(Hos. 10:14) では、ʔ は quiescent で、発音上隠れているものの、表記上は見えている。一方、kə.m では、ʔ は同じように quiescent だが、発音上も表記上も隠れている。ʔa.ti.y.ḳe.y.ho.ʔ 「テラス」(Ezek 41:15) では、quiescent な ʔ が発音上は隠れているが、表記上は見えている。一方で ʔe.le.y.ho 「彼女に対して」では、quiescent な ʔ は発音上も表記上も隠れている。

¹⁹ Gibb et al. (1954: 524-531)、特に p. 528 を参照。

これらの仮説によって、語根の中に上記の 4 文字を含む場合の議論が可能になる²⁰。たとえば、yo.ša.b「彼は住ませる」と te.še.b「あなたは住む」を考えてみたい。ハイユージ以前の文法家は、yo.ša.b と te.še.b を単純に比較して、語根は šb であると考えた。だがハイユージは、仮説 1 により、語根は少なくとも 3 文字から成り立つとして、語根を yšb と考える。te.še.b に y がないのは、仮説 2 に従い、単に「見えなく」なっているに過ぎない。すなわち、強動詞 ti.š.mo.r「あなたは守る」と同じように、te.še.b も本来 *ti.y.še.b という形を有しているが²¹、この y は quiescent であると考えたのである。このことを現代的な比例式として表せば次のようになろう。

$$\text{šmr} : \text{ti.š.mo.r} = \text{yšb} : \text{X} \quad \text{X} = \text{ti.y.še.b}$$

こうしてハイユージは、強動詞の類推から、基底形を確立する。基底形 (*ti.y.še.b) から実現形 (te.še.b) を導出するには、「y が見えなくなったため、ヒリク (i) が y を補うためにツエレ (e) になる」という規則を考えれば良い。このような基底形 X は聖書テキストの中には確認できない²¹が、以上の議論のように、基底形から実現形を考えるのは比較的容易である。そのための道具立てとして、ハイユージは (1) 消えたものの補填、(2) 文字の置換、(3) 次の文字への同化もしくは重複、といった規則を導入した。前述した te.še.b の最初のツエレは、(1) の例である。

ここで、ʔ、w、y、(h) の 4 つの quiescent な文字が、語根の各位置に現れることを考えれば (同じ文字が同時に現れることはないを仮にしておく)、 $4 \times 3 = 12$ の語根のグループを扱わねばならない。だがハイユージは、次の 4 つのケースを考えれば十分とした²²。

・ 語根の最初に ʔ を持つもの

²⁰ ハイユージ以前と以降の語根の考え方の変化については、Maman (2004: 39-40、296-8) を参照。

²¹ あるいは、ごく例外的な形としてしか存在しない。

²² なお、ハイユージは動詞記述のために、アラビア語文法家の慣習に従い、語根 p-l-i で語根を代表させる方法を導入した。

- ・ 語根の最初に y を持つもの
- ・ 語根の 2 番目に ʔ, w, y, (h) が来るもの
- ・ 語根の 3 番目に ʔ, w, y, (h) が来るもの

これが『弱文字を持つ動詞の書』(Kitāb al-afʿāl dawāt ḥurūf al-līn) に含まれる動詞の種類である。また、同じような不規則な動詞形は、2 番目と 3 番目が同一文字であるような語根の場合も生じうるので、『重複語根を持つ動詞の書』(Kitāb al-afʿāl dawāt al-maṭalain) ではそれを論じている。こうして、ヘブライ語における不規則動詞を 3 文字語根として説明するために、ハイユージは基底形における弱文字が、実現形では発音が困難であるがゆえに「隠れている」という理論を打ち立てた。そして、彼は不規則動詞の辞書を作成し、分類した全ての語根に対して動詞派生形を列挙し、基底形と異なる実現形には注釈を加えた。

5 結論

本稿では、中世のアラビア語学者であるハリールとシーバワイヒ、ヘブライ語学者であるサアディア・ガオンとハイユージを中心に、語彙学・文法学それぞれにおいて、語根という概念がどのように用いられ、発展してきたかを考察した。

彼ら 4 人に代表される言語の学者と、それ以前の学者との間には、目的、テーマ、調査方法、そして議論の仕方という点で大きな違いが見られる。彼ら以前の学者の目的は、実際のテキストを書かれたままに扱い、それがどう読まれるべきかを議論すること、すなわち正書法と朗読法に関する基準を確立することである。そのために、文字や語の出現回数を数えて分類リストを作成し、文字や母音・抑揚記号が出現する規則を定式化する²³。こうした規則の導出は、正書法で書かれた形を基にして行われた。

一方、彼ら 4 人に代表される言語の学者は、テキストの中に生き延びている言語の規則を目指す。テキスト自体は、そうした規則の実現形の 1 つと考えられる。そこで、文字や語の出現回数を数えるのではなく、言語学

²³ たとえば、聖書テキストにおけるシュワの同定方法など。

的単位を抽象し、その分類・体系化を行う。したがって、テキストには実際には出現しないが、可能性として出現しうるものを類推によって導き出す²⁴。時には仮説を立て、規則を導入しつつ妥当な結論を導出する。語根は、こうした言語学的な姿勢から生じた1つの結晶であった。

【参照文献】

- ヴェルトヴァイン, エルンスト (1997) 『旧約聖書の本文研究』鍋谷堯爾・本間敏雄訳. 日本基督教団出版局.
- Gibb, Hamilton Alexander Rosskeen, Sir, *et al.* (1954) *The encyclopaedia of Islam*. Leiden: Brill.
- Haywood, John A. (1965) *Arabic lexicography*. Second edition. Leiden: Brill.
- 池田潤・高橋洋成・池田晶 (2003) 「聖書ヘブライ語のラテン文字転写について: 文字学・文字論的考察と筑波方式の提案」『一般言語学論叢』6: 61-106.
- 亀井孝・他 (編) (1989-1996) 『言語学大辞典』(述語篇) 三省堂.
- Maman, Aaron (2004) *Comparative Semitic philology in the Middle Ages*. Translated by David Lyons. Leiden: Brill.
- Sáenz-Badillos, Angel (1993) *A history of the Hebrew language*. Translated by John Elwolde. Cambridge and New York: Cambridge University Press.
- Tene, David (1971) 'Linguistic literature, Hebrew'. *Encyclopaedia Judaica*. Vol. 16: 1352-1390.

²⁴ 聖書テキストの中に見られない語根や語型を用いることに抵抗を示す学者も少なくなかった。Sáenz-Badillos (1993: 230-233) を参照。

Arabic and Hebrew Linguistics in the Middle Ages: Development of the Root Theory

TAKAHASHI Yona

The aim of this paper is to clarify why the root theory was needed and how it developed.

Arabic Linguistics, which stemmed from Abū al-Aswad, consisted of two sciences: lexicography and grammar. Arabic lexicographers aimed at registering the complete vocabulary of the language. To order items, however, they required grammatically-abstracted roots of words.

Sībawayh, an Arabic grammarian, categorized all the known patterns of nouns, verbs, and particles according to the number of root-letters (minimum two, maximum five). He realized that every Arabic verb consisted of three root-letters.

Ḥayyūj, a Hebrew grammarian, formulated that every Hebrew verb consists of three letters, like in Arabic. He classified Hebrew letters according to their mobility and quiescence, and proved that Hebrew weak verbs contained a quiescent letter and they also had three root-letters.

A main purpose of their study was to describe the rules of the language, differing from scholars before them whose aim was to set a norm with regard to both orthography and recitation of the text. The concept of the root was a fruit of their linguistic efforts.

Doctoral Program in Literature and Linguistics

University of Tsukuba

1-1-1 Tennodai, Tsukuba, Ibaraki 305-8571, Japan

E-mail: s025035@ipe.tsukuba.ac.jp